

特集にあたって

Purpose of this feature

佐藤理人*

建築・都市分野における環境評価認証に関する取り組みは、1990年に英国のBREEAMが公表されて以降、米国のLEED、日本のCASBEE等、各国で制度が整えられ、継続的に制度の更新が行われてきた。また建築物のホールライフカーボン評価についても、1997年にLCA（Life Cycle Assessment）の規格であるISO14040が国際規格となって以降、実用化の取り組みがなされてきたが、限られた建築物等でのみ使用されてきた側面もあった。しかしながら2020年の菅内閣総理大臣（当時）による所信表明演説における2050年脱炭素社会実現の宣言やその後の関連法改正、世界的な金融緩和による影響等を受けて、2021年以降国内においてもESG投資が急激に拡大し、合わせて環境評価認証制度の利用件数も大幅に増加した。

他方で環境評価認証制度やホールライフカーボン評価においては、幅広い項目から総合的に評価がなされる仕組みとなっているが、評価認証に馴染みのない学会員にとっては、実際に研究開発を行っている環境技術等も評価対象となっているにもかかわらず、認識が不十分な場合も多いと思われる。今後、新たな環境技術の採用・普及には、こうした環境評価認証やホールライフカーボン評価が一翼を担っていくと考えられる。

そこで今回の特集記事のテーマである「環境評価認証とホールライフカーボン評価の拡がり」では、国内外で広く普及し始めた制度について各分野の専門家や、実際に評価認証制度やツールの開発に携わっている先生方に最新の情報を解説いただくことで、開発初期とは異なる普及拡大が進んでいる状況と多様な制度の仕組みを理解する一助となるのではないかと考えた。

次頁以降の特集記事では、まず日本における環境評価認証制度の中で普及が進んでいるCASBEEに

ついて、実際に開発に携わり、全体の幹事も務められている林立也先生に最新の動向を解説いただいた。また国内外のエンボディドカーボン評価に関する最新動向を、環境評価認証制度や公的な省エネルギー評価制度等との関連も踏まえながら早川梨穂氏に解説いただいた。

また高木智子氏、名木田早紀氏には、欧米に加え近年日本からの参加者も増加しているGRESBについてESG投資の動向も踏まえながら解説をいただいた。

そして小林謙介先生には、日本における建築物を対象としたLCA評価の中心的な役割を担い、2024年3月に改訂されたばかりの日本建築学会「建物のLCA指針」について、評価方法の詳細を解説いただいた。

最後に多田裕樹氏には、建築・都市分野の中でも特にランドスケープ分野における環境評価認証として国際的にも普及しつつあるSITESについて、植栽の炭素隔離量の具体事例等も踏まえながら解説いただいた。

いずれも最新の動向を踏まえた貴重な内容であり、新たに環境評価認証制度の普及に加え、ホールライフカーボン評価（またはエンボディドカーボン評価）が環境評価認証制度に取り込まれつつある状況や、建築業界にとどまらず、不動産や金融業界との関係も深まりつつある状況が理解いただけるのではないだろうか。改めてご多忙中、原稿の執筆を快諾いただいた執筆者の皆様に感謝申し上げますとともに、本特集が今後様々な地域・都市・建築において広がっていくであろう環境評価認証やホールライフカーボン評価の理解につながる一助となれば幸いである。

* 高知工科大学 システム工学群